



Vol.58

机の上の小さな変革



現実的というリミッター

こんにちは、菅俊一です。今回はある問題を解決するための思考プロセスについて考えていきたいと思います。とにかく何でもいいから問題を1つあげて考えてみるというのも難しいので、今回は単純に、「この雑誌を閉じたあとで、いま読んでいるページにすぐアクセスできる方法」を考えてみましょう。3分くらいで、1つだけでなく可能な限りたくさん考えてみてください。



いかがですか？ 3分でも結構いろいろなことを思いついたのではないのでしょうか。たとえば、付箋を貼ったりページの角を折っておくというように、ページに何か添付したり加工をするというアプローチや、ページの中にしおりや何かペンなどのモノを挟むというアプローチもあるでしょう。もちろん、ページの下に書かれているページ数を覚えておくというアプローチも有効です。

このように、基本的には何らかの差異や特徴点を見出すことで、他のページと分別できる状態をつくるというアプローチによって、ページへのアクセスをしやすくするアイデアが出たのではないのでしょうか。こういったアイデアは、普段からさまざまな場面で見ることができ、実際に使われた経験もあると思いますので、みなさんもそこまで苦勞せずに思いつくことができたのではないかと思います。

無意識化で設定される条件を外して考える

さらに極端に考えてみると、とにかくあらゆる方法を使ってこのページにアクセスできるようにすればいいわけですから、たとえば何度も何度もこのページを開き続けて開き癖を付けてしまうアプローチや、表紙は残したうえでこのページ以外のページをすべて切り離してしまうようなやり方でもよいはずです。

しかし、実際には多くの方がこのような極端なアプローチで解を出すことはないと思います。私たちは何か問題を解決しようとする際に、今回の例であれば、雑誌の形態は壊さないということや、身の回りにあるものを使って簡単に解決するなど、予め条件には入っていない「現実的な」コストを含めた実現可能性を妨げない要素を、勝手に条件に入れてしまいがちです。

それは、業務の効率化などの面ではまったく正しい行動なのですが、何か未知なるものを掴もうというときには、あり得ない選択肢を積極的に選ぶ、状況を突破する思考が必要になってきます。

今回であれば、ページの下を折り曲げるといった加工に留まらず、ページ自体を排除していくアプローチのように、極端にパラメータを振り切って考えていくことで、自分のリミッターを外して考えることができるかもしれません。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。